

教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科文化科学系比較社会学専攻の井上登喜子先生をご紹介します。井上先生は、大学院では比較社会学専攻音楽表現コース、また学部では文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現コースご所属です。

無名の大衆の視点から 音楽を研究する

我を忘れて熱中する何かを求めて



Inoue Tokiko
井上 登喜子

Q ご出身ご経歴等について 教えてください。

出身は、東京です。本学とのご縁は、お茶大附属高校に遡ります。小さい頃から3歳年上の姉と一緒にピアノやソルフェージュを習っていました。実技中心の音楽大学はたくさんありますが、実技と音楽学の両方を学ぶことのできる大学は、お茶の水女子大学だけと思い、中学生の頃から進学を心に決めていました。それで同じキャンパスなら大学の様子も分かるのではないかと、お茶高を受験したのです。大学時代は演奏実技と勉強に明け暮れる日々を送り、大学院では、演奏する機会の多かったロマン派のシューマンを修士論文の研究対象としました。いろいろ調べるうちに、シューマンがドイツのドレスデンに住んだ時期に、アマチュアの合唱団を設立・運営し、地域の人々と交流していたことを知りました。従来の音楽学では作品を対象とした研究は多かったのですが、シューマンとともに合唱活動に携わった「無名の人々」の存在を知り、「音楽の社会史研究に取り組みたい」という気持ちに駆り立てられました。すぐにドイツ語を特訓し、資料収集のためにドレスデン近郊にあるシューマン研究所に足を運び、修士論文を書き上げました。博士後期課程に進学してすぐに、当時留学中の夫がいるアメリカで1年3ヵ月を過ごしました。ハーバード大学のクリストフ・ヴォルフ教授（パッサ研究）の指導を受けたり、若手研究者とディスカッションしたりと、よい経験になりました。帰国後は、シューマンゆかりの都市ドレスデンの合唱協会を広く調査するようになりました。西洋音楽史の表舞台には登場しない、アマチュアの音楽的営みを当時の社会的、文化的脈絡において捉えたいと考えたからです。19世紀ドイツにおける市民の合唱活動の音楽

社会学的研究として博士論文にまとめました。博士号取得後は本学大学院助手を2年間勤めた後、前任校の東邦音楽大学で9年間教員をしました。今年の4月に本学に着任し、学生からも先生方からも研究に向かう刺激を日々頂いています。

Q 先生のご専門は何ですか？ また研究の内容と、なぜその ような研究をするように なったのか、教えてください。

音楽学、特に西洋近代音楽の受容について研究しています。博士論文から引き続き、歴史上の記録に名を残さない大衆が、いかに音楽と向き合い、音楽を享受し、再創造することによって音楽文化を担ってきたのか、その意味を探りたいと研究しています。現在は、こうした受容研究の視点に加え、データベース構築と統計的手法を用いた実証分析を導入し、日本と海外のオーケストラのコンサート活動の国際比較に取り組んでいます。また、音楽の聴取の問題にも関心を持っています。19世紀のロマン主義哲学とドイツの国民国家形成という社会状況の双方が、西洋近代の交響曲聴取をどのように形づけたのかを論じた研究書を翻訳し終えたばかりです（お茶の水女子大学名誉教授 近藤謙先生との共訳。近日刊行予定）。

Q ご趣味などはありますか？

ミュージカルが好きです。小学校2年生の時に初めてテレビで見たサウンド・オブ・ミュージックに感動して、小学生の頃は脚本、作曲、出演、録音を1人で全部行うミュージ

カルごっこで遊んでいました。附属高校ではミュージカル好きの友人と一緒に有志のグループを立ち上げ、お茶大のミュージカル・サークルの結成にも関わりました。

また最近、小学校5年生の息子に付き合っ、サッカー観戦、キャンプやスキー、山登りが趣味になりました。おかげで、1人でテントも立てられるようになりました。息子を出産したのは助手時代です。息子と共に登校し、当時できたばかりのいずみナーサリーに息子を預けて仕事をしていました。いずみナーサリーがなければ安心して働くことはできなかつたと感謝しています。

Q お茶大生の印象は？ お茶 大の学生にメッセージを

お茶大生は、まじめで優等生が多いように思います。学業についてはもちろん、人生設計もきちんと考えている人が多いですね。それは女性が長く活躍し続けるために必要なことだと思います。とはいえ、人生は計画どおりにいかないこともしばしばあります。そういう状況も愉しむくらいのつもりで、前向きに歩いていけるしなやかな強さを身に付けてほしいと願っています。そのためにも、学生の間は、失敗を恐れず、我を忘れて熱中するような何かをもつことが、その後の人生につながっていくのではないかと考えています。学生の中にはユニークな発想を持つ人も多く、そんな学生達と一緒に、音楽学に新規性を打ち出す独自の研究を続けていきたいと思っています。

文責：水村 真由美
（大学院人間文化創成科学研究科
文化科学系 准教授）